

[ここに入力]

雑学。三毛猫は、黒・茶・白の3色の毛色の猫を言います。そのほとんどがメスです。オスが生まれる確率は30000分の1。この3色が出るためには、XX染色体が必要なのだそうです。そのためオスは体が弱いなど問題があるようです。

# 紅葉台



# 新聞

第74号

2023年

4月22日

発行人：関谷 孝

## 「猫」について（続、辞書の話）

関 邦義

第60号で、「犬」の話を載せていただいたところ、「猫」の方はいつになるのかという声があるとのことなので、今回は「猫」を取り上げる。

犬派の私が、嫌いというのではないがいまひとつ猫に親しみがもてないのは、おそらく子どもの頃の体験が影響している。小学生の頃、薄暗い理科準備室で見たホルマリン漬けになっている解剖された猫の標本や、鍋島猫騒動の化け猫、さらにはエドガー・アラン・ポーの『黒猫』等のイメージがトラウマになっているせいに違いない。もっとも、漱石の『吾輩は猫である』を読んでからは、多少変わってきてはいる。

ともあれ、とりあえず『言海』を引いてみる。ご存知の方もおられると思うが、『言海』は内容や体裁が整った日本で最初の辞書で、奥付を見ると初版が明治22年になっている。今回は、2004年に筑摩書房から復刻されたものを使用する。この復刻版の原本は、昭和6年3月15日発行のもので、この時点で628版とかなり版を重ねている。定価は一円八十銭。今なら三〜四千元といったところだろうか。

○ねこ(名) | 猫 | (略)古ク、ネコマ。人家ニ畜フ小サキ獸、人ノ知ル所ナリ、溫柔ニシテ馴レ易ク、又能ク鼠ヲ捕フレバ畜フ、然レドモ竊盜(窃盗)ノ性アリ、形、虎ニ似テ、二尺ニ足ラズ。性、睡リヲ好ミ、寒ヲ畏ル、毛色、白、黒、黄、駁(マダラ)等種種ナリ、其睛(ヒトミ)、朝ハ圓ク、次第ニ縮ミテ、正午ハ針ノ如ク、午後復タ次第ニヒロガリテ、晚ハ再ビ玉ノ如シ、陰處ニテハ常ニ圓シ。(『言海』復刻版：筑摩書房)

実は、この語釈に対して、理知派にしてかつ懐疑派の芥川龍之介が、次のようなクレームをつけている。「成程猫は膳の上の刺身を盗んだりするのに違ひはない。が、これをしも『窃盗の性アリ』と云ふならば、犬は風俗壊乱の性あり、燕は家宅侵入の性あり、蛇は脅迫の性あり、蝶は浮浪の性あり、鮫は殺人の性ありと云つても差し支えない道理であらう。按ずるに『言海』の著者大槻文彦先生は少なくとも鳥獸魚貝に対する誹謗の性を具へた老学者である。」(『澄江堂雜記』二十四「猫」)

この芥川の批評のせい、数年後に刊行された『大言海』(『言海』の増補版)では「然レドモ竊盜ノ性アリ」の一文は削除されたらしい。

次に、前回同様「日本でいちばん売れている小型国語辞典」という三省堂の『新明解国語辞典』で調べてみたが、「犬」

に比べると、見劣りがすると言わざるをえない。長年愛用している小学館の『新選国語辞典』の語釈も平凡で精彩を欠く。そこで、辞書の中の「都会派」(サンキュータツオ氏)と称される『岩波国語辞典』を引いてみることにする。この辞書の最新版の帯には「いま読みやすい語釈を目指し、▽印の注

記もさらに充実」とある。

○ねこ【猫】①愛玩用、また、ねずみを取らせるなどのために、古くから人が飼ひ親しむ獸。普通、犬より小さく、鋭い牙と爪がある。鳴き声は「にゃー」と聞きなされる。犬が忠実だとされるのに対し、魔性(ましよう)のものともいわれ、またのどを鳴らして人にすり寄る姿を媚態(びたい)になぞらえたりする。雄の三毛猫(みけねこ)は少ないので、福をもたらすといわれる。▽広くは野生のものも含め、ねこ科の小形の種の総称。(②以下、略)(『岩波国語辞典』第八版)



確かに読みやすく面白い。なんだか、「猫派」に寝返りたくなるような記述である。辞書の語釈は絶対ではない。辞書に書いてあるから正しいと思ひ込まずに、芥川龍之介のように懐疑的・批判的に読むことも大切だ。また、複数の辞書を引くことで辞書をもっと楽しむことをお勧めしたい。

## 粕谷和夫の観察日記

### アズマイチゲ



片倉城址公園でアズマイチゲの花を撮ったら、花の中にハナグモがいました。このハナグモ、よく見ると、小さな獲物を捕まえていました。ハナグモは、花に潜んで獲物を待つカニグモの仲間です。

♥ 生き物の生態が上手くとらえられていて感心します。春になると生き物が生き生きと活動する様子が伝わってきます。

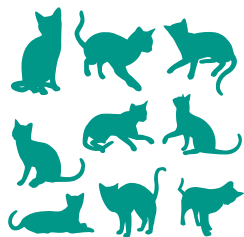
### コブシとヒヨドリ



八王子・小宮公園のコブシの大木です。今年も見事に咲きました。この公園の隣に三宅島元氣農場がありました。三宅島の噴火で一時避難された方々が野菜などを栽培した場所です。この元氣農場に昭和天皇が訪れたとき、ちょうどこのコブシが満開になっていて、天皇がお寝めになったというコブシです。満開の花の中に動くものがあつたので、よく見るとヒヨドリが花を食べていました。

♥ 見事な大木ですね。私たちは木の枝をすぐに切ってしまう。それは、私たちの生活の邪魔になるという身勝手な理由からですが、枝を切らないでそのままの姿にしておくとなんにも木そのものの美しさを見ることが出来ます。その意味でも貴重なコブシの樹です。ヒヨドリは雑食なので、繁殖力も強いです。

★右の写真は、紅葉台団地・初音台公園のコブシの写真です。北京に駐在していたころ、カラオケでよく北国の春を歌い、日本に対して郷愁に浸りました。特別な花です。(読者の風来坊さんから)



「高尾フモト同盟」のHPに紅葉台新聞が公開されています。高尾の地元の方たちが運営しています。よかったら覗いてみてください。きっとお役に立つ情報がたくさんあると思います。